国際協力事業団高校教師海外研修（ヴィエトナム）に参加して

槙　本　直　子※

【抄録】　国際協力事業団ＪＩＣＡは、日本政府の途上国への援助を実施する立場から高校教育に携わる者を対象に途上国の現実と国際協力の現場を視察し理解を深める海外研修を実施している。平成９年度募集の高校教師海外研修のヴィエトナム班10人の一人として、国内研修（２日間）と海外研修（11日間）に参加する機会を得た。国際社会における日本の役割とその現実の課題をこの研修を通して考察する。また、生徒のグローバルな視野と歴史的洞察力を育てる開発教育の教材として検討する。

【キーワード】　開発教育　グローバル教育　発展途上国　国際協力　国際援助　政府開発援助（ＯＤＡ）　ヴィエトナム

1　はじめに

総合人間科のスタートとともに、「教師の力量が問われる」という言葉がつぶやかれるようになった。「脱教科、脱教室」は生徒だけでなく我々担当教官自らも、広く社会と関わり視野を広げる必要性を強く感じさせた。

総合人間科初年度、高校１年の個人研究の担当グループ内で、国際協力や日本とアジアとの関係、南北問題などをテーマにする生徒達といくつかの問題について考え学ぶこととなった。また、フィールドワークで国際協力事業団（ＪＩＣＡジャイカ）にお世話になったことがきっかけで、翌年の夏休みには東海北陸地区５校の高校生とともにＯＤＡ（政府開発援助）実体験プログラムに誘っていただき、途上国に対する日本の果たすべき役割や国際援助の理念を再認識する機会が得られた。それまで新聞雑誌等マスコミによる日本の国際援助批判を目にすることが多く、かなり先入観や偏見を抱いていたが、直接その仕事に携わる人達の話は情熱的、新鮮で目を見開かされる思いがした。

そして１年前、ＪＩＣＡが途上国における日本の国際援助の現場を視察する高校教師海外研修を企画していることを知り、応募した結果、幸いにもヴィエトナム班の一員として参加できた。

－研修のねらい－（ＪＩＣＡの募集要項より）

1990年代になり、地球社会は大きな変動の時代を迎えました。東西冷戦構造の崩壊後、各地で頻発している民族紛争、世界的な経済状況の低迷に加え、環境や人口問題などの地球規模での問題が山積しています。

よりよい明日を目指し多くの開発途上国が努力していますが、特に貧困や経済の低迷などの問題は、国づくり、人づくりに大きな障害となっています。

日本は戦後の国際秩序の中で各国との協調をはかり、援助を受ける立場から、高度経済発展を遂げるに到りましたが、経済大国となった今国際社会の中でその役割に大きな期待がかけられています。国家間の相互依存が進む中で開発途上国への援助を実施することは、日本が国際社会において果たすべき責任を積極的に担うことを意味しています。

この研修はＪＩＣＡが日本政府の途上国への援助を実施する立場から、教師の皆様に途上国の現実とＪＩＣＡ事業の現場を視察していただき、理解を深めていただく機会をもうけることにより次の世代を担う人材を育てる開発教育の研究・実践に寄与することを目的としています。

2　研修参加に際して、特に主眼をおいた点

新教科「総合人間科」ではこれまでの教科・科目ではとらえきれない現代の教育課題を総合的に学ぶことを目的にしているが、この教育課題として取り上げられているキーワードは、「生命、環境、国際理解、人権、平和、生き方」などである。人間と自然、社会の関わりを地球規模で考え、理解し、自らの行動規範に結び付けていこうという理念は「開発教育」に通ずる。総合的学習のカリキュラム作成や指導方法を研究するため、開発教育の手法を学び、また生

※1998年４月より　愛知県立豊田東高校

きた教材としての海外での国際援助の実態を肌で感じ知ることが研修の目的であった。

その中で特に主眼をおいた点は以下の三点である。

（1）ＯＤＡの実態について自分の目で見る

新聞、雑誌等マスコミによる日本の国際援助批判をよく目にするが、昨年のＪＩＣＡ東海北陸支部主催の“高校生ＯＤＡ実体験プログラム”により、日本の援助理念を再認識した。相手国の自助努力支援が具体的にどのような形で実施されているのか、何が問題であるのかを、先入観なしに自分の目で見る。

（2）国際協力の現場で活躍する人々の生の声を聞く

ＪＩＣＡの役割は開発途上国の国造りの主体となる人材の養成が基本であると聞く。

異質の文化的伝統を持ち多くの課題を抱えた途上国で、その国の人と共働して目的を達成するために越えなければならない問題や感じていることを知る。（「異文化との接点で」時事通信社　のＪＩＣＡ専門家や青年海外協力隊の人々の声がたいへん興味深かった。）

（3）ヴィエトナムの実態を知る

国際協力を考える上では、まず途上国の抱える問題をしっかり認識することが大切である。これまで途上国と呼ばれる国には、個人旅行でタイに行ったことがあるだけなので、もう少し深くアジアを知る一歩にしたい。

特に、ヴィエトナムは今アジアで最も熱い国といわれ、社会主義から市場経済化の導入により急速に変容していると聞く。そのヴィエトナムの活力を肌で感じる。

3　平成９年度高校教師海外研修日程

＜事前国内研修＞　ＪＩＣＡ東京国際研修センター
（資料１、２、参照）

第１日（７月28日）

14：00～14：15　開会行事
14：15～15：00　参加者自己紹介
15：15～16：00　ＪＩＣＡ事業について
概要説明、質疑応答
16：15～18：30　グループ別ディスカッション
開発教育について
国際交流について
国際協力について

第２日（７月29日）

９：40～10：40　前日のディスカッションの報告
11：00～12：30　各国別概要説明、訪問国情報
14：00～17：00　開発教育ワークショップ
部屋の四隅
ランキング…開発とは？
私の世界地図イメージマップ
シュミレーション
18：00～19：30　結団式

＜資料１＞　開発教育ワークショップ「ランキング…開発とは？」

＜ねらい＞

①正解はないことを理解してもらい、自分なりの答えを見つけてもらう
②対等な立場で議論に参加する
③さまざまな方法や考え方があることを理解する。
④各選択肢は多くの場合、プラスとマイナスの画面を持っているという点に気付く

＜用意するもの＞

開発についてのランキング・シート

開発とは、

1 国の生産、富、仕事が増えること。	2 権力がより平等に人々に分配されること。	3 人々がより健康で幸せに暮らし、自身を持ち、周囲の国々に興味を持つこと。
4 交通網などの産業基盤も発達して、経済成長が成長すること。	5 近代的職業や大きな工場などのような進んだ技術を取り入れること。	6 生活を維持したり、豊かになるために外国に頼ることをやめること。
7 強くて安定している政府をつくること。	8 誰もが中等教育を受けることができ、より良い家族計画ができ、充実した保健サービスが受けられること。	9 貧困をなくすこと。

＜進行方法＞

（1）四人一組でグループをつくる。
（2）一人一人「開発とは？」という課題に対して、順位づけのためのカード９枚より、最も賛成と思われるものの二種で１～９のカードの順位づけをする。
（3）グループ内でそれぞれ比較する。

＜進行方法＞

a．バラツキが見られる→カードの内容が抽象的な言い方をしているため、様々な立場の人が見た時、色々な意見が出てくる面白さがある。
b．見方によって変る⟶個人レベル、国レベルで考えた時に考え方に違いが現れる。どの立場で見るかによって変わってくる。
c．並べ方が大切なのではなく、お互いの意見でのディスカッションをする事が大切となる。
d．一つの選択肢（各カード）に判断がつかなくなるような性質の違う二つ以上のことがらを入れない。

＜資料２＞
「タイ農村の開発…シュミレーション」
（タイを題材として）

＜ねらい＞

①ある事柄を模擬体験することで、問題をあきらかにするとともに、参加者が言葉では理解しにくい状況を実感として認識する。

＜進行方法＞

(1) 5つのグループ（5～6人1グループ）をつくる。
(2) 5つのグループにそれぞれシュミレーションの用紙を一枚ずつ配る。
それぞれに次の立場でその村の状況が説明されている
例　＊課題　1．この村の若者で村の将来を考えるプロジェクト担当者
2．UNDP（国際開発計画）のプロジェクト担当者
3．日本のNGO（民間活動団体）のプロジェクト担当者
4．タイ政府の地域開発プロジェクト担当者
5．日本企業（商社）のプロジェクト担当者
(3) 各グループ一人一人がそれぞれに、開発プロジェクトを企画する。
進行役は途中タイの様子（生活）を写真を通して紹介する。
(4) 各グループで企画したプロジェクトを6項目にまとめる。
1．プロジェクトタイトル　4．プロジェクトの期間
2．プロジェクトの目的　5．プロジェクトの予算
3．プロジェクトの対象　6．プロジェクトの流れ
(5) グループ内でそれぞれの立場のプロジェクトを発表する。会員による発表。
(6) 5つのグループそれぞれが、グループ内で1～6番までの番号をふり、胸にそれぞれの立場のシールを貼り、同じ番号同士6つのグループに分かれ新しいグループをつくる。
(7) グループ内で各自それぞれの立場の代表ということでプロジェクトを発表する。ここで、各グループが議長を中心にプロジェクトをまとめる。（議長は予め5つのグループの中の1グループ6人全員が議長と決めておく）
(8) プロジェクトをまとめたら立場のグループに戻り、各立場での意見をフィールドバックさせる。

＜まとめ＞

a．それぞれの立場の人が集まり話し合うことで、いろんな能力が加わる。
b．ロールプレー的要素もある。
c．目的、目標を持って取り組ませる。
d．自己評価をしてみる。
例　気付いたこと、発見したこと、わかりにくかったこと、もっと詳しく知りたいと思ったこと

【この村の状況】

この村は、首都バンコクから北へ約600kmの山中にある人口200人程の小さな農村である。昔から焼畑農業を中心にほとんど自給自足の生活を営み、自然と調和した暮らしをしているが、現金収入は村の女性たちがつくる幾何学模様の美しい織物くらいで、一家族の年間の収入は約400ドルに満たない。しかし最近は、バンコクや北部の中規模の都市の近郊に進出している日本企業の工業団地へ出稼ぎに出る村の男たちもいて、村の幾つかの家では自家発電でみるカラーテレビがあり、大人も子どもも世界のニュースや最新のファッション情報などの触れる機会が多くなっている。村人の中にはその悪影響を心配するものもいれば、家族全員で工業団地の近くに引っ越しを予定しているものや村の近くに工場ができれば良いと考えているものもいる。

一方、伝統的に行ってきた焼畑農業は森林を破壊するとして、国内外の環境保護団体や政府からも中止するよう通達が出ているが、この村の自然条件にあった新しい農業知識と技術をもった人材はここにはいない。この村の子どもの小学校の就学率はほぼ100%になったものの中学校への進学率は50%に満たない。高校まで進学するのは10人に3人程度で、彼等も進学で街に出ると田舎の生活にはなかなか戻ってこない。保健医療の面では、近代的な病院も工業団地の近くにできたが、医療費の心配や西洋医学に対する不信も根強い。悪いことに村から1時間ほどの幹線道路沿いにできた商店では、昔はあまりなかった甘いお菓子やジュースが売られ、歯磨の習慣のなかった子どもの歯は虫歯に侵され、また、ゴミを焼却する習慣もないのでお菓子のはいっていたビニール袋は村のあちらこちらに散乱している。村人の中でも、伝統的な暮らしを守りたいと思っている人もいれば、近代的な生活に慣れている人もいる。

＜現地研修＞　ヴィエトナム（ハノイ）

第1日（7月30日）
成田発　香港経由　ハノイ着

第2日（7月31日）
午前　ＪＩＣＡ事務所
ヴィエトナム援助の概要
午後　専門家活動現場視察
（司法省　ミニプロ「法整備」）

第3日（8月1日）
午前　市場経済化プロジェクトオフィス
午後　専門家活動現場視察
（農業地方開発省　林業）

第4日（8月2日）
午前　市内視察（ホーチミン廟）
ハノイアムステルダム高校訪問
午後　自由行動

第5日（8月3日）
終日　自由行動
（青年海外協力隊員と農村訪問）

第6日（8月4日）
午前　専門家活動現場視察
（道路機械訓練学校）
北部橋梁建設第3橋視察
午後　北部橋梁建設第8橋視察

第7日（8月5日）
午前　市内視察（ホム市場）
午後　専門家活動現場視察
（農業地方開発省　農業）

第8日（8月6日）
午前　プロジェクト技術協力現場視察
（情報処理研修所）
午後　専門家活動現場視察
（特許庁）

第9日（8月7日）
午前　協力隊員活動現場視察
（ハノイ外国語大学日本語教育）
タンロン大学学長との意見交換
午後　協力隊員活動現場視察
（日本研究センター視察）

第10日（8月8日）
午前　専門家活動現場視察
（農業地方開発省　灌漑）

ＪＩＣＡ事務所訪問
午後　自由行動
第11日（８月９日）
ハノイ発　香港経由　成田着

4　ヴィエトナムの印象

ここ数年はヴィエトナム青年を主人公にしたテレビドラマが放映されたり、ヴィエトナム熱が高まり旅行者も増えていると言う。が、何といってもヴィエトナムといえば歴史的なヴィエトナム戦争をパッと連想するのではないだろうか。高校生にとっては生まれる前の1975年に終結しているとはいえ、20年以上たってもその印象は強烈。繰り返しアメリカ映画で描かれ、映像の中でのヴェトナム戦争は今の若者も知っている。「プラトーン」「７月４日に生まれて」「フォレスト・ガンプ」などは、現在の高校生もよく見ている。

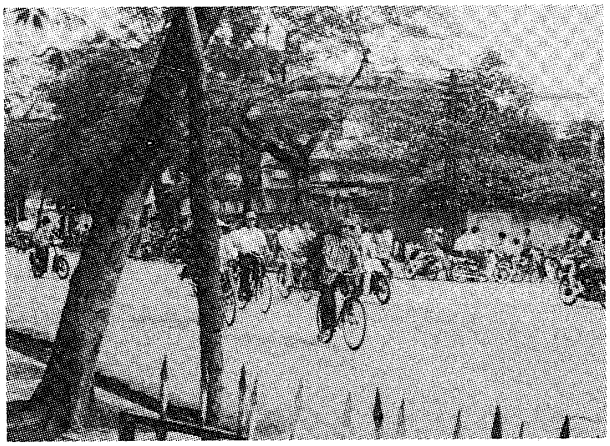
私にとってのヴィエトナムも沢田教一氏のピュリッツアー賞の写真「戦火を逃げまどう一家」、本多勝一氏のルポ「戦場の村」であり、「枯れ葉作戦の傷跡」であった。アメリカ人の心に大きな傷跡を与えたヴィエトナム戦争というワンパターンで貧困なイメージしかなかった。（Ｔ．オブライエン「本当の戦争の話をしよう」、ハロラン芙美子「黒い壁」）

海外研修先のヴィエトナム、パキスタン、パナマの３カ国の中から、ヴィエトナムを第１希望としたのは、アメリカの枯れ葉作戦のダイオキシンによる二重胎児などの奇形や障害を抱えた人への医療援助や、枯死した森林の回復への取り組みがあるのではないかという関心からである。（残念ながら実際の視察では、ハノイだけで南へは行けなかった。）また、ヴィエトナム戦争以外を全く知らず、最近になってドイモイ（刷新）政策により「今アジアで最も熱い国」「急速に変容するヴィエトナム」という言葉に好奇心をかき立てられたことも大きい。

ークラクションの音あふれる街ー

現在はアジアの通貨危機など経済破綻が騒がれているが、昨夏はまだまだ元気なアジアという雰囲気であった。その熱い国ヴェトナム（といっても首都ハノイのみの滞在、ホーチミンに行けなかったのが残念）の一端を紹介する。

街角に立つとまず最初に飛び込んでくるのはけたたましいクラクション。すぐ脇をバイクが駆け抜け、目の前を横切る天秤棒で荷物を運ぶノン（すげ笠）をかぶった女性…。どの人も精悍な顔つきでスリム、日々絶え間なく汗を流して働く人のたくましさを感じさせる。したたかと言ってもよいような生活力に



道路は自転車とバイクばかり…

道端で商売するのは女性が目につく

あふれた街ーそれがハノイである。フランス植民地時代に整備された美しい街路樹の緑の下は、地面に座り込んで商売する人でいっぱい。道路はまだ車は少なく（ほとんどが外国人所有かタクシー、工事用車）、バイクと自転車がすべての車線を占領し、交通ルールもないのか、交差点は先に突っ込んだ方が勝ちみたいな恐ろしい状況（三度も交通事故を目撃）だ。蒸し暑く、狭い家で大家族で住んでいる人々は夜になると２人、３人、４人乗りでバイクにまたがり、涼を求めて目的のなくバイクで走り回る…。ガソリンはペットボトル入りで道端に売っていた。

国内生産ＧＤＰで考えるとヴェトナム人にとってのバイクは日本人にとってのベンツに相当する資産価値があるそうだが、それがどういう訳か裸足にサンダル、パジャマが外出着のヴィエトナム人の手にたくさんわたっている。どこからお金を調達してくるかと言えば親戚中から借りまくるらしいのだが、銀行と自分の国の通貨ドンを信用せず米ドルのタンス貯金で小金を貯めているのでＧＤＰが実際より低くなっているとのこと。（経済援助をしようにも統計

もなく実態がつかめない難しさがあるそうだ。）

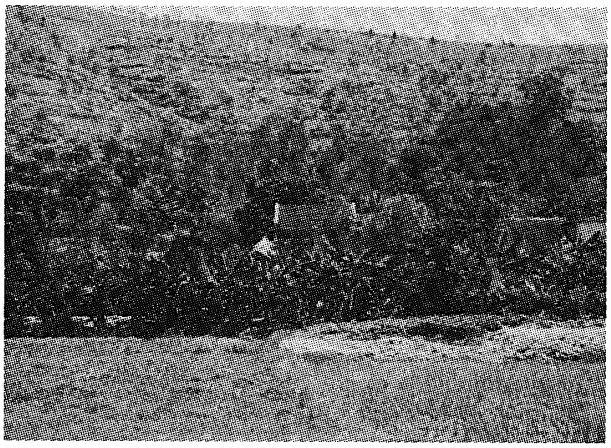
果物、野菜、肉、雑貨…、質はともかくモノは街にあふれ商魂たくましい人々の活気に満ちて貧しくともこれからの発展を感じさせる風景。ハノイを初めて訪れた年輩の日本人はその印象を異口同音に「終戦後の日本に似ている」と答えるそうだ。

ヴェトナム国情ー北が南を支配する国

ヴィエトナム社会の特徴を一言でいうと「近代と平和を知らない国」。人口の８割を越える圧倒的多数は農民であり、首都ハノイでも水牛と手作業の水田が広がっている農村社会である。ヴェトナム戦争後も戦いに明け暮れ、いたるところに見られる橋や道路の破壊という物理的傷跡だけでなく、人々の考え方や心性も未来が見えない状態が続いていたという。今日やっと将来を考えることのできる時代がやってきたのだが、戦いの影響はまだ強く残っている。

ヴィエトナム戦争は、ホーチミンをリーダーとする社会主義国「北」がアメリカの支援を受けた「南」を開放した戦いで、現在も政治的には北が南を支配している。小国ヴェトナムが大国アメリカに勝てた原因は、個々人、各家庭の献身的自己犠牲に底辺で支えられた共産党の組織力とホーチミンのリーダーシップによるといわれる。指導者から山岳民族にいたるまで徹底した平等主義と愛国心を鼓舞し、「貧しさを分かち合う社会主義」は「明日にでも実現される豊かな社会主義という夢のために今日は貧しさに耐えて皆が奮闘する」よう受け入れられてきた。ホーチミン自身も全く気取らず質素だったそうだが、現在でもみんなが貧しいので当たり前のように不満も持たず生活しているような気もした。インドやパキスタンなどは貧しいといっても貧富の差が大きく、金持ちは日本ではとても考えられないような贅沢で文化的な生活をしているという。エリートは留学経験豊富で教養もあり外交交渉でも日本の官僚など足元にも寄れないとか。ヴィエトナムはそれと比べると飢えて死ぬ人もいなければ大金持ちもいない、みんなそこそこ貧しい。

しかし、社会主義が世界中で崩壊していく中、ヴィエトナムも例外ではなく、悪平等がはびこり豊かさに対する渇望が広範に噴出してきた。そこで登場したのがドイモイ政策である。社会主義理論にとらわれずに市場経済を導入し対外開放、経済発展を目指そうというものだ。日本の援助協力もその視点から法律や情報管理の政策決定や助言を行っている。ところが、その政策決定などの政治的主導権が相変わらず北にありながら、経済的に資本主義を導入し始めるとそれに慣れている南の方がノウハウもあり



ハノイ郊外の農村風景

ビデオカメラをのぞきこむ子ども達

圧倒的に強いし農村部も気候的に恵まれた南の方がはるかに豊か…。この南北の格差が大きな国内問題となっていることを多くの協力現場で耳にした。

ハノイの街を観光客として歩いている分にはそこが社会主義国だと感じることはない。モノは結構豊富で自由に流通しているし、人々の顔、特に子ども達はとてもよい表情で抑圧されたものは感じられない。ホーチミン廟や軍以外ではどこにカメラをむけてもかまわないし、ビデオカメラには人々が物珍しそうに寄ってくる。しかし、実際に生活をしているといろいろな政治体制の違いによる壁にぶつかるそうだ。まず、基本的に西側（もう東西という分け方はないのかも知れないが）のボランティアや援助を信用していないところがあり、青年海外協力隊もスパイを警戒してハノイ市内のみ、日本語教師だけという制限がある。勝手に地方に行くことや、思想、経済などの情報が広がるのをできるだけ押さえようとしている。協力現場にコピー機を持ち込むのが難しかったり、コンピュータ技術の指導する際でもインターネットはまだ許可されていないという状況。

何をやるにしても手続きが複雑で活動に必要な車が手元に届くまでに半年かかるということも。ちょっと前までは外国人と個人的に出会ったヴィエトナム人には尾行がついたという。協力隊の方は友人となった学生の家に遊びに行って泊めてもらう許可を得るのがたいへんだったそうだ。市民生活を管理（監視？）する「公安」は市民にとっても嫌われ者で首をすくめて仕方がないなあという感じである。外国人に対する制限は随分緩和されてきているが、入国審査は厳しく時間がかかり怪しい（？）人物は荷物検査など徹底的だそうだ。写真、雑誌などの情報源のチェックもあり、特にポルノに対する規制は強く日本の一般週刊誌に載っている女性写真が見つかると没収される。

5　ヴィエトナムにおける援助の実態

ＪＩＣＡは政府開発援助（ＯＤＡ）のうち、二国間贈与（技術協力と無償資金協力）を担当している。特に人から人への技術協力が中心であり、相手国の人材を育てることに主眼がおかれている。実際の途上国現場においては、相手国政府や中枢機関の人と一体となって活動する専門家や、一般の人達の生活の中に入って草の根運動として活躍する海外青年協力隊などさまざまな立場がある。単身で相手国の組織に入って奮闘する人、プロジェクト方式といって専門家派遣、機材供与、研修員受け入れがセットになった技術協力、さらにはそれらを調整していくＪＩＣＡ職員の方…。今回の訪問では12カ所（なかなかハードなスケジュール）の活動現場でお話を伺うことができた。お会いした専門家10人のうち３人が名古屋大学に関係の深い方で、国際協力が身近に感じられた。

各訪問先の概要と所感を以下に述べる。

（1）ＪＩＣＡ事務所

最初に対ヴィエトナムＯＤＡ全体の概要と特徴説明をしていただいた。今回の訪問に際しての視点（特に市場経済化移行にともなう問題）が示されよいガイダンスとなった。

事務所が開設されたのはほんの３年前の1995年のことで、1976年にヴィエトナムが南北統一をして以来15年間は日本の援助は中断されていた。それ以前には南ヴィエトナムに対して医療援助などを行っていたがそれもすべて停止していたという。再開されてからは、75年以前に行ってきた援助の再活性化や、戦争によって南北に分断されていた道路、鉄道、橋などの整備のための調査、北部での新しい援助の開始準備に取り組んでいる。

外国に対する不信感やドイモイ以降の貧富の差、

司法省での記念写真　後列中央が武藤氏

国内（南北）格差の広がりへの懸念などヴィエトナムの現状は興味深い。特に青年海外協力隊や西側ボランティアが警戒され制限されていることを初めて知った。政治的には問題が少ないと思われる医療援助も協力隊ではないのも驚きであった。また、芸術や体育といった教科がなく自由的発想の教育がなされていないので初等教育現場への協力隊派遣を考えたいという言葉は印象的であった。

（2）司法省ミニプロ「法整備」

市場経済導入によって必要となった民法、商法と執行の諸規則の整備と人材の養成を行っている。日本の助言で民法ができ、登記法や供託法も日本に近いものができたなど、科学技術や物質的援助ではない国の根幹である司法で知的な援助がなされていることに認識を新たにした。日本の法体系がドイツの成文法にアジア的要素を入れたものでヴィエトナムに受け入れ易いという話は、アジアに対する日本独特の援助の方向を示していると感じた。

ここで個別専門家としてして活動されている弁護士武藤氏（名古屋出身）は法律事務所をやめてハノイへ赴任。1996年制定された民法を実際に運営していくのに必要な法案や執行手続きについて司法省で助言、指導されている。社会主義国が市場経済を導入しようとする時、まず求められるのが法整備である。外国資本も途上国の法律がころころ変わり対応に右往左往するようでは引き上げてしまう。ヴィエトナムも現在その傾向があり早急にきちんと体制を整える必要がある。西側のヴィエトナム熱も冷め出し、ここ数年が正念場とも聞いた。

日本が援助するきっかけとなったのは民法を作成する際に名古屋大学法学部の森島教授（現在は退官されて上智大学）が個人的に親しくアドバイスしたことからだそうだ。法律の輸出は文化の輸出であり、自国と同じような法体系になるとその国に経済進出

し易いのでどの国もやりたがるのだとか。欧米型援助は自国の論理で上から下へすべて押しつけのような形、日本は相手国に決定権を委ねるようにいくつかのプランを提示し共同研究する形、と違いがありプライドの高いヴェトナム人にはアジア的日本方式が受け入れ易い。

武藤氏はネパールやヴェトナムなどをよく一人歩きしアジア好きが弁護士会の耳に入り派遣要請を受けたそうだ。自分の手がけた法案が国会で審議されるというトップでの仕事は日本の国際協力の中でも特異な内容で充実した日々を送っているそうだが、何不自由のない日本の生活から仕事をやめての参加（給料もおそらく半減だとか）と情熱がなければ引き受けられない。オフィスは机３つほどがやっと入るほどのスペースでパソコンも足りない。いつ停電になるか分からないのでバックアップ体制も必要である。

（３）市場経済化プロジェクト

ヴィエトナム経済の特徴と専門家の活動状況を伺った。ここで活動されている天野氏は日本経済界の中枢で活躍されていた方で定年後ヴィエトナムにみえたそうである。日本の50年前の戦後の状況によく似たヴィエトナムに郷愁を感じながら、この国の今後に想いを傾けてみえる。彼の途上国の経済基盤造りにかける熱い情熱を強く感じる訪問であった。

また、法整備援助と同じく、９月の国会で審議する政策に関わるという国のトップレベルでの活動に日本の影響の大きさを感じた。綿密な情報収集と分析、データで理論的に問題点を指摘する姿勢が途上国の開発計画には不可欠であることを指摘されたが、競争理論の発想のない社会主義国で価値観の変革を促すような活動の困難さが伝わってきた。

この訪問では、途中２回停電があり、まだ電力の供給など十分でなく生活基盤が脆いことがはっきり示された。（この後３度ほど停電には遭遇）

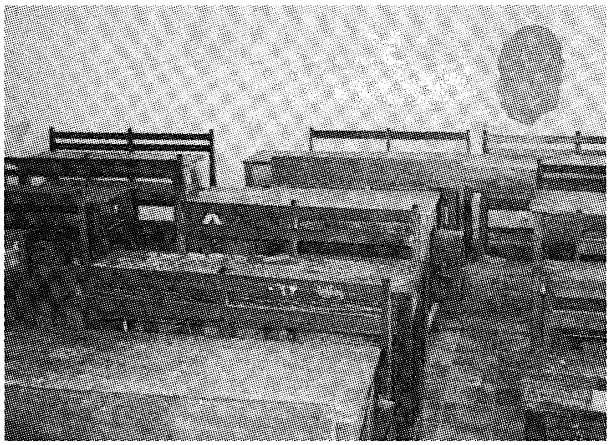
（４）農業地方開発省（林業）

ここでの個別専門家の役割は、林業開発の計画担当、植林計画・図鑑の編纂への提言である。

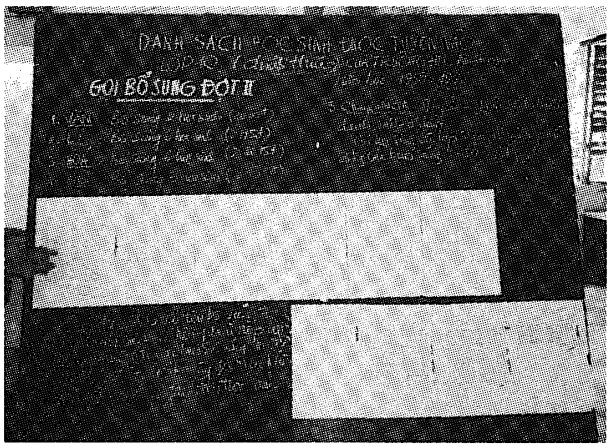
開発には必ず環境破壊の問題がつきまとう。人口増加と枯れ葉剤の影響で40年で森林が半減－とヴィエトナムでも深刻な状況である。環境に配慮できるのは豊かになった国、森林の重要性を国民に啓蒙するという発言を重く感じた。「ヴィエトナム人の知的レベルは高く、政策的にうまくやれば植生はもとに戻る」－専門家のこの言葉に期待したい。

（５）ハノイアムステルダム高校

開発途上国の抱える問題のうち人間が生きていく上で最低限必要とされているベイシック・ヒューマン・ニーズ、一番基本的で代表的な援助対象が医療と初等教育である。ヴィエトナムは国の貧しさから見ればアジアの最底辺に近いのだが、妊産婦や乳児の死亡率は比較的低く、識字率は非常に高い（89%）。このことは、至るところで耳にした「ヴィエトナムの人は賢い」「勤勉」という言葉に象徴される事実だ。歴史的に中国の文化圏で過去には科挙制度があり文人が尊重され、難しい文字をアルファベット化し（フランス植民地時代から）一般の人に普及させたりと向学心が高い上に教育に熱心なお国柄があらわれている。



ハノイアムステルダム高校の教室



玄関に張り出された成績表

残念ながら初等教育の現場への訪問はかなわなかったが、ハノイでトップレベルというハノイアムステルダム高校を訪れる機会を得た。学校の紹介では、校長先生（フランスの大学で数学を教えていたこともある）には誇りと自信のほどがうかがえた。

非行やいじめ（日本のいじめ問題は結構向こうの人達も知っていた）や登校拒否などという問題は皆無で、とにかく学校で勉強したい、この学校に入りたいという人ばかりだそうだ。生徒の数に対して教

室が足りないので、小・中・高すべて二部制（午前の部の生徒の方が優秀だと言ってみえたので選別があるようだ)、授業時間が少ないのでなかなか充分な教育はできない。ほぼ全員が塾に通い補充、家庭学習４～６時間は普通だとか。恵まれない環境であるが故に、かえって学びたいという意欲がわくのだろうか。カリキュラムには芸術や体育はなく（クラブ活動はある)、自由な発想を育てるという視点は乏しく、ひたすら知識を詰め込むことに終始する。学校の玄関にある黒板には成績や入学試験結果（９月が新年度）が張り出され、なかなかシビアだ。高校最後には全国統一の卒業試験があり、その結果がよければ無試験で大学に入学できる。

ヴェトナムの高校進学率は70％、大学進学率は20％と思ったより高く、ここにも教育に力を注ぐ国民性が伺われる。中国、日本、韓国等と同様に受験競争、学歴社会は根強い。経済は厳しくとも教育を進めようと共産党も国策として教育の充実を掲げ討論をしている。

また、この高校では他に先駆けて高校１年でコンピュータ授業を行ったり、外国人との交流など情報化社会への対応も見られた。しかし社会主義での情報規制はインターネットが許可されていないなどまだまだ多く存在する。外国語はかってロシア語中心であったのが英語に変わり、現在ハノイでは小学校高学年10才からスタートしている。

（６）道路機械訓練学校

日本のＯＤＡ資金を活用した学校の改善計画助言が行われている。この学校では道路建設に関わる技術指導をしているのだが、設備と技術は旧ソ連や中国からのもので老朽化し現実に対応していない。西側の援助がスタートして（日本も1992年からと最近）新式の高性能機器の取扱いのマスターが急務となっている。しかし実習主体の学校でありながら車の種類も台数も絶対的に不足し、ヴィエトナム社会全体に共通する問題点であるが、まだまだ多くの物質的援助が必要な段階であることが痛感された。人と技術を活かすには器を整えることは重要。教育現場でも同じであろう。

民間企業から道路機械訓練学校の改善計画と教官指導に出向されている安江氏は名古屋大学工学部の出身。元々企業のハノイ駐在員として３年前に赴任、一年前ＪＩＣＡからの要請を受け専門家として活動してみえる。彼の一家はハノイ定住の日本人家族としては最も古株だそうで、ヴィエトナム観もなかなか鋭いものがあった。旅行者としてみれば治安はよく物価は安く楽しいが、ここで仕事をし利益をあげようとするとたいへん、ヴィエトナム人はしたたかで苦労の連続と嘆きながらもすっかりヴェトナムにはまっている感じであった。

北部橋梁建設現場

（７）北部橋梁建設

道路機械訓練学校視察の後、安江氏も一緒に無償資金援助による橋梁建設現場へ悪路を行った。戦争により至るところで道路や橋が分断されたため、インフラ整備が求められ現在21カ所の橋が同時に建設されている。日本の援助の基本方針が相手国の要請に答えるというものなので、21カ所の建設場所の選定はヴィエトナム政府が行ったものである。政府はヴィエトナム戦争当時の少数民族の貢献の返礼として橋を建設する考えらしく、建設現場はなぜ？と感じるような辺鄙な所であった。どれだけ必要性が高いのか、取付道路は60ｍしかなく橋だけ造っても（道路はヴィエトナム国営）交通網は整わないと疑問を感じた。まず国のメインロードを整備する必要があると思うのだが、日本側から計画を出すことはできないようで担当している方もジレンマを感じていた。少ないスタッフで広範囲に散在する現場を担当し、時間と忍耐の仕事、困難さが伝わってきた。

（８）農業地方開発省（農業）

農業政策支援（日本への援助案件申請の助言）が行われている。

欧米型（援助する側が調査立案し政府に提案）と日本型（援助される側が立案申請）の違いが良く分かった。米の生産強化への援助は日本の農業政策とからみ申請しても採択されないということを知り残念に感じた。また、形として残るものをほしいという求めにどう答えるのかも難しいところだ。

（９）プロジェクト技術協力現場　情報処理研修所

ヴィエトナム情報処理技術と政府振興策（通称ＩＴ2000）による学制改革に伴うハノイ科学大学の再編開設に関わっている。

情報技術は軍事目的でソ連東欧から輸入したもの

からの転換が求められている。この分野では基礎がなくてもそのまま技術移転が可能であり、日本は決して優れているわけではなく、ソフト面ではインド、シンガポール、フィリピンに及ばず高い競争力を持つわけではない。なぜ日本かという疑問に答える必要があるという話にはこれからの日本のあり方を考えさせられた。

(10) 特許庁

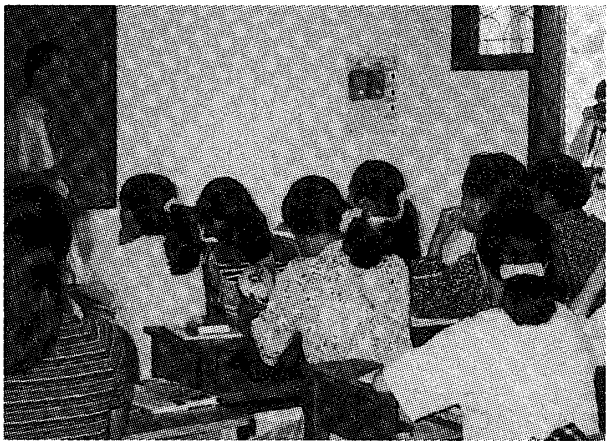
特許制度の整備と普及、コンピュータ化と審査方法など特許制度の基本的なしくみと歴史の話は、直接国際協力には関係なかったが興味深かった。社会主義で個人の所有権が認められるのか疑問であったが、制度のない国には技術移転したがらないため内外無差別に整備すべきとの言葉に「国際社会」とは何かを再認識させられた。ボーダーレス時代にあっては世界共通のシステムが求められる部分は多いと感じた。

(11) 青年海外協力隊活動現場　ハノイ外国語大学

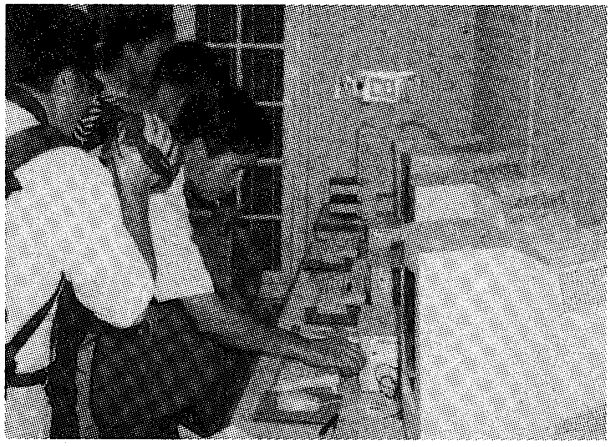
ヴィエトナムで唯一海外青年協力隊が認められている日本語教師の方々の活動を見せていただいた。ヴィエトナム人学生の向学心の高さには感心する一方であった。授業を直接参観したが、2年の最初で助詞の使い方などかなり難しい内容を学び、作文もこなしていた。協力隊の方も口を揃えて学生の熱心さに触れていた。

その一方でヴィエトナム人教師への日本語教育の技術移転や授業改善が思うように進まない嘆きも聞かれた。その理由の一つに教師の待遇の悪さがあげられた。学校の先生の給料はたいへん低く40～50ドル／月、一家4人が1カ月生活するためには250～300ドル必要と言われ、教員だけでは食べていけない…。生活に追われ教材研究などには手がまわらないというのが実状のようである。塾や家庭教師に100%の子どもが頼るのもこのような背景があるとのこと。都市よりも地方の方がその現状は厳しく優秀な人は都市に出てしまい教師のなり手がなく教育力を失い格差が広がっている。日本語教師として活動しているある協力隊員は「学生はとても熱心でよいが、一緒に授業を行うカウンターパートと呼ばれるヴェトナム人教師がアルバイトに忙しくやる気がないのがたいへん。何度も『ヴェトナム人なんか大嫌い』と叫びながら自転車で走った」とぼやいていた。協力隊の役割は現地で自分が一労働力として動くことではなく、現地の人を育てる、人と技術の移転をすることなのでその目的を達成するのが難しい。そんなぼやきの中でも、自分の教えた生徒から次代の若者を育てる人が出てくるのを期待して頑張っている姿は前向きであった。

教育は途上国にとって未来を支える最も重要なものであり、教師の地位の向上が望まれる。特に地方の教育水準の低さは問題であろう。

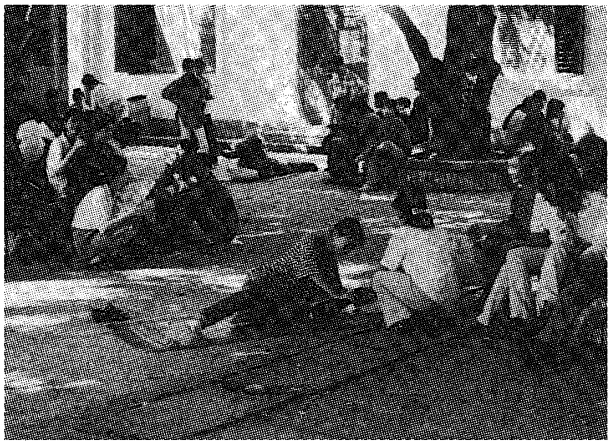


ハノイ外国語大学日本語授業



日本の援助でできたコンピューター教室

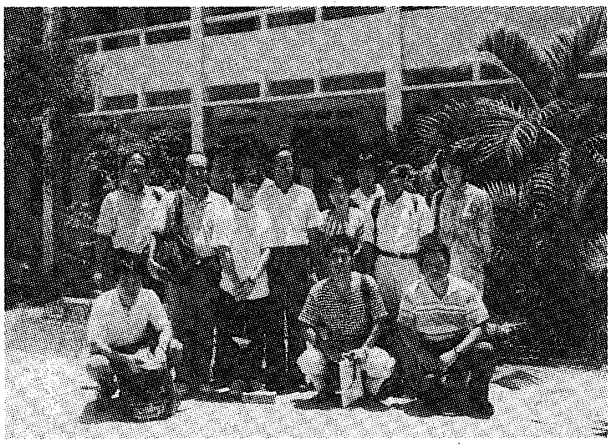
大学内の喫茶店



大学構内で行われている軍事訓練

(12) タンロン大学学長との意見交換会

ヴィエトナムは社会主義国であり、かっては学校もすべて国立であった。しかし、ドイモイ政策の中から民立という日本でいう私立の学校も登場しつつある。その一つ、最初の民立タンロン大学のムイ学長にお目にかかることができた。日本で15年勉強してみえた方で日本語は不自由なく話され、日本人の協力者、支援者も多い。教育は社会の要求であり、国民が参加投資することが大切、自分達で国を作っていくのだという熱い言葉が感動的であった。教育制度が毎年変化し、教科書が不足、系統的学習ができないといった多くの問題を抱えているが、日本では失われつつある学びへの意思がヴィエトナムの未来を感じさせた。



タンロン大学ムイ学長を囲んで

(13) 青年海外協力隊員活動現場

日本研究センター

日越関係や日本の歴史、情報図書を研究するこのセンターでは職員の日本語学習を応援しており、日本の教育をテーマにディスカッションを行った。いじめや受験、労働観、女性問題等に発展して話題になりヴィエトナムの生活事情や関心が多少うかがえ、楽しい時間であった。

(14) 農業地方開発省（潅漑）

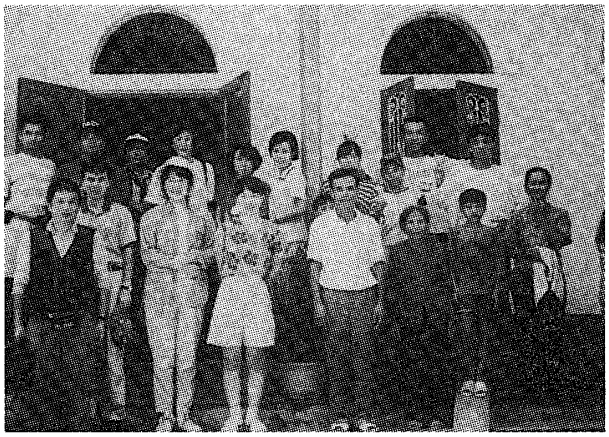
農業政策支援として個別専門家の方が日本への援助案件申請の助言をしている。食糧供給はだいたい行き渡りその他の雑貨も町のいたるところに溢れいるが、ドイモイの成果はこれからが正念場。農業の機械化や潅漑においても、人口が都会に流れて一人当たりの耕地面積がふえるのは50年後と聞くと前途多難。地道な活動が必要であると感じた。

(15) ヴィエトナムの農村

正規の研修日程とは別に、協力隊員の栗林氏のご好意に甘えて日曜日を利用してハノイの北、車で３時間の農村を訪れることができた。栗林氏は千葉県の現職教員からハノイ外国語大学に派遣されて１年を迎えていた。訪問した農家は、彼が弟と呼んでいる生徒さんの自宅である。ヴィエトナムの８０％を占める農民の暮らしはまだまだ貧しいというが、ドイモイにより確かに変化してきているといえる。ガスや水道はないが電気はあり、２部屋の家の中にはベットと扇風機、ラジオとテレビがある。トイレは外で家畜小屋の中である。彼の家には精米機があり、近所の人達が集まってくる裕福な家のようであった。

我々がマイクロバスで到着すると、子どもたちが大勢見に集まってくる。ハノイ市内でさえ少ない車が珍しくて仕方がないという感じである。家族全員で温かい歓迎を受け、手料理までご馳走になった。

栗林氏が最初にこの農家を訪れる際には公安がう



訪れた農家の一家とともに

るさくなかなか許可されなかったということだが、1年の間にも随分状況は緩和されている。

6　協力現場の視察を通して

どの訪問先でも具体的で詳細な活動内容を伺うことができた。社会制度や歴史文化、生活習慣の異なる地での活動に伴う多くの矛盾や困難点を知るとともに、専門家や青年海外協力隊の方々の熱意が強く感じられ、書物やデータでは見ることのできない生身の人の姿が良く分かった。国際社会における日本の役割を考える良い機会となった。以下に学校教育において国際関係を扱う場合の参考になったこと、問題点として取り上げたいことを具体的に示す。

＜参考になったこと＞

（1）国際社会における日本の援助のあり方

日本の国際援助に対する批判には「経済利益を求めて企業と結託して援助プロジェクトの推進に努め、受け入れ国住民の人権抑圧と環境破壊を侵している」「相手国の実状を無視し明確な理念や供与の基準が曖昧なままに大量のモノ・カネ・テクノロジーをばらまいている」というものがある。しかし、こうした批判とは異なり、日本の援助の理念が開発途上国の自助努力を支援することを重視したものであり、相手国の要請に従って行われていることが今回の訪問ではっきりした。

特に、司法省法整備支援や市場経済化プロジェクトでのお話で、相手国との共同研究、チームワークによって行う日本独特の方法でヴィエトナム政府の中枢で国の政策に関わる援助が行われていることは驚きであった。また、開発援助の主体は相手国であり、様々な提言をして決定は相手に委ねるという姿勢には上から下への援助ではなく対等な関係が感じられ共感を覚えた。

生徒達には日本に求められていることが何であるのかを考えさせたい。

（2）国際社会で活躍する人の姿

今回訪問させていただいた協力現場には様々な立場の方が見えた。個別専門家では弁護士、国家公務員（農林省、特許庁）、民間企業からの派遣、定年後の方…。青年海外協力隊には大学卒業したばかりの人、現職の高校教員、先進国で働いていた方…。ヴィエトナムでは1992年にＯＤＡが再開されたばかりで、受け入れ体制も十分ではないということだが、それでも専門分野も法律、経済、行政、農業、機械、語学と多岐にわたり、様々な分野で国際協力が求められていることが分かった。

協力活動をしている方々は、途上国の抱える経済的問題や電気や交通といった社会環境整備の不足、さらには社会制度の違いなどによる様々な活動の壁を語りながらも、自分の存在意義を実感し目的を持つ人の自信と情熱が感じられた。

現在の高校生の中には、夢を語ることもなく目的のない進路選択をする者も多い。視野を広げ世界に目を向け、地球的規模の現代社会の抱える問題を解決していく力の必要性を認識させたい。実際に国際協力の現場で活躍する人の姿を紹介することで具体的に国際社会をイメージすることを期待する。特に、本校の母体である名古屋大学関係の方が専門家として３人もいらっしゃったのでより世界が身近に感じられるのではないかと思う。

（3）途上国の実態

ビデオ、写真などで町や人の様子を記録してきた。一口に発展途上国と言っても様々な国があるが、特定の国ヴィエトナムを通じて南北問題を考えさせたい。植民地支配を受け、さらに度重なる戦争によって国土が荒廃した結果、現在のような状況がある。50年前の戦後日本の姿があると言われた方もいるが、今の日本の生活と比較することでこれまで日本がたどってきた道や、その中で学んできたこと失ってきたことを見つめさせたい。特に、ヴィエトナムの学生達の向学心の強さは今の日本では感じられないものである。劣悪な学校施設や二部制、軍事訓練の中での高い学習意欲を知り、自分の生き方を見直させたい。

＜疑問に思ったこと＞

（1）要請主義援助の問題点

日本の国際援助が政治的な価値や経済開発についての日本の考え方を押しつけるのではなく、受け入れ国側の主体的責任によって要請されることは分かったが、長期的な展望のもとで計画されているのか疑問に思うこともあった。例えば無償資金供与による橋梁建設において、実施されている21カ所の選定はヴィエトナム側が行ったそうだが、国全体の交通網や経済活動を念頭に決定されているとは思えなかった。橋梁建設だけを担当するのではなく、計画段階から助言できないものか。

（2）国益と国際援助の関係

農業地方開発省の訪問の際に、日本の農業を保護するために米作援助には消極的であると言う話があった。真の国際援助は人道的、道徳的な立場から国益に優先して行うべきだという考えと、ＯＤＡも日本国民の税金から出されるものであるからまず国益があるという考えが出された。ＮＧＯによる協力と異なり、政府がイニシアティブをと

り実施される大規模な援助だけにこの問題は大いに議論となる点であろう。相互依存の国際関係を理解し、世界の貧困や格差の問題に目を向けた国民のコンセンサスを得ることが必要ではないだろうか。

（3）社会体制が異なる国への援助のあり方

ヴィエトナムへの青年海外協力隊の派遣はヴィエトナム側の警戒心から地域（ハノイ市内のみ）職種（日本語教師）が限定されている。その一方で国の根幹に関わる法律や経済システム政策に専門家が派遣されている。法律専門家は国の基本的な考え方を示すものが法であり、法の輸出は文化や言語の輸出に近いと述べられた。市場経済化とともに資本主義的価値観や文化が浸透していく中でヴィエトナムは国の体制をどのように変化させていくのであろうか。また、援助が内政干渉にならないであろうか。

（4）援助への理解

ＪＩＣＡ職員の方が言われたことだが、顔の見える援助をめざし人と技術の移転を行っているが、受け入れ国にとっては目に見えるモノがないと援助の実態が伝わらないそうだ。自助努力への援助という日本の理念が理解されるには、相手国の受け入れ体制と継続性が必要ではないだろうか。

7　おわりに

東京での事前研修を含め２週間という短い期間ではあったが、国際協力をめぐる現実の学習を通して、書物やマスコミからでは得られない体で感じるものが多く、フィールドワークの意義を自ら納得した時であった。

単なる観光旅行とは違い、実際にその国で活動、生活をしている方々から率直な意見を伺うことができたいへん感謝している。これまでにＪＩＣＡの資料や一般書物から開発途上国の抱える問題やＯＤＡについては多少知識は得ていたつもりであったが、具体的な活動内容に触れ、実感の伴うものとなった。特に、学校という狭い社会にいるとなかなか知ることのできない政治や経済、法律といった分野のお話はたいへん興味深く視野が広がった感がある。

今回学んだことをささやかながら学校教育現場に還元していきたいと考えている。